

新・切手の日誌

Stamp Diary



2011年9月号

9月3日（はじめに）

今月はオーストラリア。

はっきり言って、関心の薄い国だった（過去形）。それが、工作上、豪ドルの動きに関心を払うようになってから、徐々に気になる存在になっていった。世間一般的にはどうなんだろう。

数年前、シドニーに行って記念に切手を勝手帰ろうと思ったら、使用済なのに意外と高くて止めた。生活するには居心地良いが、観光はコアラとカンガルー以外に何をイメージすればよいのかと捻くれてみたりもした。そもそも、私は友人がそのまた（私と共通でもない）友人の結婚式に参加するのにくっついていっただけであるから、なおさら掴み難い国だった。一人であれば行かない。

しかし、きっかけは豪ドルでも、わかってくると楽しいかもしれないことに気づいた。そうそう、シラーのワインが自分好みであったことも発見だった（私はフランスものはあまり好まない）。学生のころ、スキーをしにニュージーランドに行った経験もあるのだから、捻くれず接してみれば、糸口はいろいろある。

切手であるが、他国と比べるとシリーズものの切手には愛国心が滲んでいるようにも感じる。交換パートナーとバザールで購入したものを、そのまま袋に入れておいた。ようやく、年代順に並べたので、ざざっと並べてみた。



1972



1973



1974



1975



1976



1977



1978



1979



1980



1981



1981



1982







お気づきかもしれないが、エリザベス女王の登場が多い。それもオランダやデンマークのようにデフォルメしたりせず、ストレートな図案の女王さまだ。引き続き、1980年頃を中心に、知らなかったオーストラリアの切手の特色を独断と偏見たっぷりに紹介してゆく。

下旬では、2000年以降を紹介しよう。実はオーストラリアの交換パートナーが増えてきているので、（フランス同様）期待もしなかったのにコレクションが手厚くなりそうだ。

9月9日（表紙）

今月の表紙はこちら。

何が私を捕らえたかと言えば、この消印、よくみるとCoca Cola!!ではないか。



こういうのはアリ？ これは企業宣伝？

オーストラリアの郵便事業やるなあ。日本も民営化したらこれくらいやらないと。明日紹介するが、この切手はLIVING TOGETHERというシリーズものの1枚。なんとなくCoca Colaのイメージにお似合いではないかな？

9月10日 (Living Together)

1988年発行のLiving Together ベタな訳をすれば「一緒に生きる」とか「共生」かな。絵柄を見ると、それらしく共存を彷彿させるような内容であることは、容易にわかる。



日本で発行された1988年の切手では、ここまで気軽な絵柄はまだない。そういう意味では、オーストラリアという国は随分と（良く言えば）堅苦しくないし（悪く言えば）軽い。だけど、移民が主体である意味多民族国家であれば、こういう風に切手からジワジワ国民を啓蒙してゆくのも面白いと思っている。そのくせ、アメリカみたいに白人いて黒人いてアジア人いてヒスパニックがいるわけでもなく、結局のところ白人しか登場していない。

そして、こういう何かを伝えようとしている（ような、していないような）切手が好きなのである。

9月19日 (Australian folklore)

オーストラリアン・フォークロア「オーストラリアの民間伝承」と直訳すれば、そうなる。どこが民間伝承がよくわからない。むしろ、絵柄だけ見ると「ある男と女の人生的一幕」という気もする。

BLOKEは「やつ」とか「野郎」なので、THE SENTIMENTAL BLOKEで「感傷的な男」なのか？



英語でないような英語のような単語を辞書で引き引き内容を解読すれば、まああるセンチメンタルな男（寅さんみたいなひと？）が、人並みにドリーン（Doreen）という女性にチョッカイかけ、やがて結婚し息子まで生まれ... という平凡な人生にしか見えない。

要するに、オーストラリアの平均的男性は涙もろいも適当にやりながら人間として普通だということ？ よくわからない!! シリーズとして全部揃っていることに私は満足しているが、平凡過ぎて深読みできない!!

だけど、普通が一番だからね。

9月23日 (2000年代)

中抜けして、一気に2000年代へ移ろう。

90年代から、どこの国でも一気に発行種類が増える。そして一枚一枚の図案が大味になってきている。その代わり、一枚一枚で図案やそのテーマとの関連を妄想するのではなく、複数毎のセット全体でテーマを味わうべき傾向が感じられる。

これから、交換パートナーからセットで欠けている一枚を探してくる必要もあるが、ひとまず手元にあるものを貼込帳として並べてみた。



1998

2011.9



2001

2002



2003



2004

2011-9

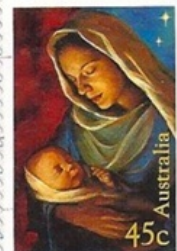


2005



2006

2011-9



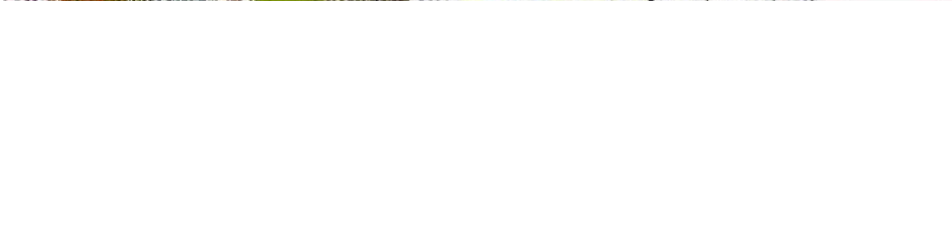
2008

200



2009

2011.9





枚数が多いのでストック・ブックのストックがなくなってきたし、どうせ使用済切手なので、
 こういう貼込帳の方が何だか手軽で楽しい。そのうち、このままだこからの切手市にでも持参し
 てしまいたい衝動に駆られる。市場の祝祭的な雰囲気弱い。

9月24日（俳優）

2009年発行のこれ「Australian Legends」

Legendsの翻訳が難しいが、どの方も世界規模で有名な俳優さんたちである。ラッセル・クロウなんて、私はアメリカ人かと思っていた。ニコール・キッドマンもケイト・ブランシェットも美人だが、よくみると個性的な顔をしている。キッドマンは顔のパーツがギュッと顔の中心に凝縮している感じだし、ブランシェットは爬虫類系…。なんて失礼なことを言ってしまったが、それが役に入ってしまうと、人が変わる化け物ぶりとなりその個性を感じる。

ブランシェットの化け物ぶりは、やはり「エリザベス」だろうし、キッドマンは「ムーランルージュ」より「めぐり会う時間たち」や「ドッグヴィル」のほうが化けていると思う。



一方男性陣では、ラッセル・クロウは「ビューティフル・マインド」も捨て難い。ジェフリー・ラッシュはもう「シャイン」でしょう。あれは観ている私も痛くなった。

こうしてオリジナリティーある有名俳優を切手にして世に示すことで、オーストラリアをアピールしていることが憎い。2000年以降、同様の切手を見かける。良い悪いは別として、個人的にはこれでオーストラリアという国（というか人々）を意識するようになったし、今回オーストラ

リアの切手も面白いかもと思った。すっかり、企画者・制作者の思うツボだろうか。オリンピックのゴールドメダリストシリーズもあり、収集を狙っている。

それにしても最近ほとんど映画観ていない。老後は毎日1本は観よう。

今月の即興現代アート「傷つきし人たち」



また擬人的手法に頼ってしまった。

今月のオーストラリアは交換パートナーからの入手だけではなく、紙付使用済み切手からの収集もかなり含まれたので、汚れた・破れた・折れたなどの切手が多数あった。まあ取り扱いの荒い人間に適当に扱われたり、任務遂行中に傷ついたりもしただろう。そもそも収集は本来の目的ではないからね。

東欧諸国に多いCTO(Cancel To Order)と呼ばれる注文消しより、実際に使用されている方が私は大きな魅力を感じている。

さて来月だが、ベルギーにするかイギリスにするかしばらく悩んだ結果、瞬間的にイギリスに決めた。本命のお国だし、注文消しもない国だから頑張りたい。